

保護者と職員で生徒を支える関係づくり

足利市立西中学校 荒川竜一

1. はじめに

西中学校では、「開かれた学校」を目指し、生徒の学校生活の実態を PTA 広報紙、学年だより、学級通信、ホームページ等で学校からの情報発信を絶えず行うよう努めている。しかし、学校外部評価の自由意見欄には、「良いことは伝えるが、悪いことは伝えない。」「学校の実態をもっと知らせて欲しい。」といった意見が散見される。また、地域のうわさとして、どこの学校の話かと驚くようなことが、保護者の間に広まっていることもあった。学校の様子は、多くは生徒を通して保護者に伝わる。偏見や誤解によって事実が歪んでしまうこともあると思う。

学校の中で何が問題なのか、保護者自身の眼によって確認し、生徒が安心して生活できる西中にするにはどうしたら良いのか、学校行事などあらゆる機会を捉え、保護者と職員がともに取り組んできた実践活動について述べ、特に保護者から評価されている「見守り隊」について報告したい。

2. 西中における保護者の協力

西中学校では、保護者の協力のもとに、生徒の学校生活を支えるために、ここ3年間で以下に概略を述べる活動を実施してきた。

1) あいさつ運動

活動主体は、PTA の補導安全部と本部役員で、毎月第一月曜に、年間 9 回実施される。このうち春と秋（5月と10月）の2回は、西中地域あいさつ運動として、5日間全職員が参加し、地域の4カ所の交差点で生徒の交通指導も兼ねて実施されている。

2) 部活動巡回

活動主体は PTA 町内部会で、毎週水曜日の職員会議等で部活動指導の職員が不在の日に実施される。毎回3-4人の町内部会役員が、校庭、体育館、格技場、多目的室、音楽室等を一巡してもらっている。巡回後、部活動の様子について感想ノートに記入してもらっている。

3) 体育祭支援

毎年 PTA 保健体育部の役員を中心に、本部、広報部、成人教育部および補導安全部の約70名が参加している。体育祭での、審判、用具準備、招待者の接待のほか、校門での駐車場案内、校内巡視等に協力いただいている。

4) 合唱コンクール支援

合唱コンクールは、毎年11月下旬に市民プラザを会場として行われている。生徒は西中から市民プラザまで自転車で移動するため、行き帰りの交通指導と駐輪場での指導に協力

いただいている。本年度は、新たに補導安全部の役員の方に、会場入口ドアの管理とトイレの巡回を手伝っていただいた。

5) 見守り隊

平成15年6月より実施している。学期ごとに1~2ヶ月を見守り隊実施期間とし、保護者から希望者を募り、毎日午前と午後の2回校内巡回をしていただいている。1日あたりの参加者は、3~5名で、希望参加のため期間中の実施は不連続で、毎日巡回することはない。

6) 集金支援

毎月2日間、朝8時から8時30分まで昇降口で諸経費の受け取りと、図書室での集計を支援していただいている。保護者のうちPTA本部役員、専門部役員及、学級役員および兄弟姉妹が在籍する保護者の重複分を除き、1日につき各クラス1~2名の保護者が当番制で実施している。PTAの役員が決定した5月に年間の当番表配布し、6月から2月まで9回、当番に当たった保護者に1ヶ月前に個々に通知し徹底を計っている。出席率は70~80%である。



図1. 集金支援の一コマ

3. 見守り隊の活動

1) 見守り隊発足の経緯

平成15年度当初、1年生で多発した授業妨害をうけて、6月に臨時のPTA学年部会を開催し、全学年の保護者に呼びかけ、保護者による校内巡回を実施することにした。きっかけとなった授業妨害は、クラスの枠を越えた女子のグループが、特定の男子生徒の問題行動を批難するとともに、教員に指導を訴えるというパターンで、それが始業のチャイムや教員の制止を無視し、男子生徒がトラブルを起こすたびに繰り返されていた。

2) 活動の内容

①隊員の募集：行事予定表を簡略化して保護者全員に配布し、参加希望日を記入して返送してもらった。さらに参加者には、簡略版行事予定表に氏名と生徒のクラスを記入して再度配布した。

②活動期間：学期ごとに1~2ヶ月間とした。平成16年度は、6~7月(45名参加)、9~10月(40名参加)、2~3月(31名参加)の3回実施し、17年度は7月(37名参加)、11月(15名参加)、3月の3回実施の予定である。

③巡回時間：1日をA班(10時から13時)とB班(14時から16時30分)の2班に分けて実施した。

- ④巡回に際して保護者への要望：・腕章をつける。・生徒の指導は教員が行う。・生徒への声かけ(あいさつ)。・教室に入る場合は静粛に。・巡回後の感想の記入。

3) 保護者の感想 (16年6,7月実施分)

表1. 見守り隊参加者の感想 (抜粋)

内容	学年	肯定的感想	人数	否定的感想	人数
学 習 態 度	記入	(昨年度より)生徒が落ち着いたように思う。	10	出歩いている生徒がいた。	3
	なし	(予想していたより)静かで授業態度もまずまずだった。	6	私語が多い。	2
		暑さの中、先生も生徒も一生懸命授業をしている姿に感動した。	4	足を投げ出している生徒がいた。聞く態度が悪い。	2
		授業を受けていない生徒に先生が声をかけていたので安心した。	2	集中できない生徒を注意したほうがよい。	1
		とても明るく個性ある生徒たちだと思った。	2	居眠りしている生徒がいた。	1
		4年前に参観した時より授業態度が良くなった。	1		
		普通教室より特別教室の方が授業態度が良かった。	1		
	1年	比較的静かに授業を受けていた(安心した)。	3	席を離れて歩き回ったり、私語が多い。	6
	2年	(昨年度より)学習態度がよくなった(と思う)。	4	居眠りしている生徒がいた。	2
	3年	落ち着いて学習していた。	3	席を離れて歩き回ったり、私語が多い。	1
学 習 環 境	記入	階段などに落ちていたゴミが少なくなった。	1	ロッカー、床、机周りの整理整頓ができていない。	3
	なし	廊下、教室内がきれいでした。	2		
	1年	教室がきれいになった。	1		
	2年			教室が狭くてかわいそうだった。	2
				教室にゴミが多い。	2
あ い さ つ	記入	元気にあいさつができ、気持ちが良い。	12		
	なし	生徒の方からあいさつしてくれた。	3		
		男子の方が良くあいさつしてくれた。	1		
		先生たちも明るくあいさつしてくれた。	1		
そ の 他	記入	控え室で休憩中2名の3年生と話ができて、親として考えさせられた。	3	水道の周りが汚れていた。清掃指導をしっかりして	1
	なし	先生とはなすことができて良かった。	3	欲しい。	
		子どもたちの普段の姿が見られて良かった。	2	先生や生徒の気が散って申し訳ないような気がした。	1
		猛暑の中部活動に頑張る生徒の姿が見られた。	2		
		見守り隊にもっと多くの保護者が参加してもらいたい。	2		
		今まで話したことなかった生徒と話ができた。	1		
		自分の子の授業態度や校内の様子が見られて良かった。	1		
		半年後の変化を見てみたい。	1		
	屋外での部活動は熱中症に十分注意して欲しい。	1			

平成16年6,7月実施分 参加者45名 提出者24名

4. 今後の課題

見守り隊は、1-2ヶ月間不定期な日時に実施されるため、生徒や授業の実態が、包み隠さず保護者に伝わっているようだ。15年度から実施された見守り隊であるが、実施期間中には、授業妨害や暴力事件などは1件も起きていない。見守り隊開始時の1年生は3年生になったが、職員も保護者も「授業態度が見違えるようになった。」という点では意見が一致している。しかし、常習的に教室にいられない生徒や、授業中熟睡している生徒には、改善が見られるほど効果があがっているとも思えない。基本的な生活習慣の身につけていない生徒の背景には、様々な問題が潜んでおり、問題を抱えた生徒の保護者との連携を考える必要がある。また、集金支援活動に関しては、保護者から「何故、銀行振替にしないのか。」「朝は勤務の都合で参加できない。」といった意見が聞かれる。集金支援が始まった理由や、銀行振替にしない理由を再度保護者に説明し、理解を得る必要がある。

生徒が安心して学校生活を送るためには、今後も保護者の協力が不可欠であると考えている。

言 平

中央教育審議会第1次答申には「これからの学校が、社会に対して『開かれた学校』となり、家庭や地域社会に対して積極的に働きかけを行い、家庭や地域社会とともに子供たちを育てていくという視点に立った学校運営を心がけることは極めて重要なこと」と述べられており、学校内部の経営にとどまらず、地域に開かれた学校経営の必要性が提言されています。このことは、生涯学習の立場に立って設定された「足利市の教育目標」における、各種の教育機能の統合、いわゆる教育機能連関の考え方と軌を一にするものであります。

西中学校においては、「開かれた学校」を目指し、広報紙や学年だより、ホームページなどによって家庭や地域社会に対し積極的に情報を発信するとともに、登校時のあいさつ運動、水曜日放課後の部活動巡回、体育祭や合唱コンクールでの校内巡視や交通指導、毎月の集金支援、見守り隊の実施など、保護者が子供の学校生活の様子に直接ふれることのできる機会を多くすることによって、保護者と職員で子供を支える関係づくりに努めてこられました。

中でも、平成15年度に開始された見守り隊の活動は、各学期1～2ヶ月間、不定期に実施されることから、子供の日頃の学習活動や学校生活の様子について保護者の理解を深めることができ、また、子供の授業態度や生活態度の改善にもつながるなど、これからの「開かれた学校」づくりに対して多くの示唆を与える実践であります。

今後においても、「開かれた学校」を目指し、保護者と職員で子供を支える関係を更に充実させるために、家庭や地域社会と連携・協力を密にし、学校と保護者の相互理解と協力体制づくりに努める西中学校の実践に期待いたします。

一人一人の「読む力」の向上をめざす指導

～ことばに着目した確かな読みを通して～

足利市立矢場川小学校

1 はじめに

矢場川小学校では、基礎学力の向上を目指して、平成15年度から『めあてを持って意欲的に取り組む子の育成～国語・算数の基礎・基本の習熟を図る指導を通して～』をテーマとして、指導法の工夫を行ってきた。基礎・基本をどうとらえるかを考えながら授業研究を行ったが、二つの教科を行ったことで深まりがみられなかったという反省より、16年度から国語に絞って研究を進めることにした。

2 主題設定の理由

国語の指導法研究では、当初、国語における基礎・基本とは何か、今本校の児童に欠けている国語の力とは何か、どうしたらそれを伸ばしていけるのかを模索しながら、いろいろな領域の授業が提案された。今回の指導要領では「伝え合う力」ということが前面に出ていることや、国語の教科書でも総合的な単元が多く取り入れられていることなどもあり、話し合い活動が中心の授業や記録や報告にまとめる授業なども行われた。しかし、例えば読書会をしようとしても感想が決まり切った内容の浅いものしか出てこない、話し合いをしても話し合う内容を持ってない、調べたことをまとめようとしても資料の丸写しでしかない、つまり、読む力や語彙力が不足しているために、きちんと読み取れない、なかなか読みが深まらない、といった児童の実態が明らかになった。

そこで、一人一人の国語力を高めるためには、まずはすべての基礎となる「読む力」をつける必要があるととらえ、今年度、研究主題を『一人一人の「読む力」の向上を目指す指導』と設定した。また、ともすれば曖昧になりがちな「読む力」を、ことばに着目することを意識化させる中で意図的に指導し、読みの技能を身につけさせていきたいと考え、副主題を～ことばに着目した確かな読みを通して～とし、指導法の研究に取り組むことにした。

3 基本的な考え方

- 国語力を高めるためにまずは、「読む力」を高めていくことが必要であるととらえ、「読むこと」の領域に限って研究を進める。

学習指導要領の中では、「読むこと」の内容には、読書的な読みや必要な情報を得るための読みなども含まれているが、今年度はまず、教材文を読んで、「子どもが一人できちんと読み取れること」「読んで楽しさが味わえること」を目指したいと考え、「イ 叙述内容に即した読むことに関する指導事項」「ウ 想像的な読むことに関する指導事項」「エ 事象と感想、意見にかかわる読むことに関する指導事項」を中心に実践を行う。
- 「読む力」は、ことばに着目することを意識化させる中で意図的に指導することで、読みの技能として身につくと仮定し、その根拠となる教材分析を十分に行う。また、教材文について、系統的に考えるため、教材文を「文学的文章」と「説明的文章」に分けて、分析や指導法の研究を行う。
- 国語の時間の指導法の工夫・改善を行っていくとともに、基礎的な力の向上を目指した日常的な指導・活動にも力を入れ、実践的な研究の積み重ねに努める。

言平

中央教育審議会第1次答申には「これからの学校が、社会に対して『開かれた学校』となり、家庭や地域社会に対して積極的に働きかけを行い、家庭や地域社会とともに子供たちを育てていくという視点に立った学校運営を心がけることは極めて重要なこと」と述べられており、学校内部の経営にとどまらず、地域に開かれた学校経営の必要性が提言されています。このことは、生涯学習の立場に立って設定された「足利市の教育目標」における、各種の教育機能の統合、いわゆる教育機能連関の考え方と軌を一にするものであります。

西中学校においては、「開かれた学校」を目指し、広報紙や学年だより、ホームページなどによって家庭や地域社会に対し積極的に情報を発信するとともに、登校時のあいさつ運動、水曜日放課後の部活動巡回、体育祭や合唱コンクールでの校内巡視や交通指導、毎月の集金支援、見守り隊の実施など、保護者が子供の学校生活の様子に直接ふれることのできる機会を多くすることによって、保護者と職員で子供を支える関係づくりに努めてこられました。

中でも、平成15年度に開始された見守り隊の活動は、各学期1～2ヶ月間、不定期に実施されることから、子供の日頃の学習活動や学校生活の様子について保護者の理解を深めることができ、また、子供の授業態度や生活態度の改善にもつながるなど、これからの「開かれた学校」づくりに対して多くの示唆を与える実践であります。

今後においても、「開かれた学校」を目指し、保護者と職員で子供を支える関係を更に充実させるために、家庭や地域社会と連携・協力を密にし、学校と保護者の相互理解と協力体制づくりに努める西中学校の実践に期待いたします。

一人一人の「読む力」の向上をめざす指導

～ことばに着目した確かな読みを通して～

足利市立矢場川小学校

1 はじめに

矢場川小学校では、基礎学力の向上を目指して、平成15年度から『めあてを持って意欲的に取り組む子の育成～国語・算数の基礎・基本の習熟を図る指導を通して～』をテーマとして、指導法の工夫を行ってきた。基礎・基本をどうとらえるかを考えながら授業研究を行ったが、二つの教科を行ったことで深まりがみられなかったという反省より、16年度から国語に絞って研究を進めることにした。

2 主題設定の理由

国語の指導法研究では、当初、国語における基礎・基本とは何か、今本校の児童に欠けている国語の力とは何か、どうしたらそれを伸ばしていけるのかを模索しながら、いろいろな領域の授業が提案された。今回の指導要領では「伝え合う力」ということが前面に出ていることや、国語の教科書でも総合的な単元が多く取り入れられていることなどもあり、話し合い活動が中心の授業や記録や報告にまとめる授業なども行われた。しかし、例えば読書会をしようとしても感想が決まり切った内容の浅いものしか出てこない、話し合いをしても話し合う内容を持ってない、調べたことをまとめようとしても資料の丸写しでしかない、つまり、読む力や語彙力が不足しているために、きちんと読み取れない、なかなか読みが深まらない、といった児童の実態が明らかになった。

そこで、一人一人の国語力を高めるためには、まずはすべての基礎となる「読む力」をつけていくことが必要であるととらえ、今年度、研究主題を『一人一人の「読む力」の向上を目指す指導』と設定した。また、ともすれば曖昧になりがちな「読む力」を、ことばに着目することを意識化させる中で意図的に指導し、読みの技能を身につけさせていきたいと考え、副主題を～ことばに着目した確かな読みを通して～とし、指導法の研究に取り組むことにした。

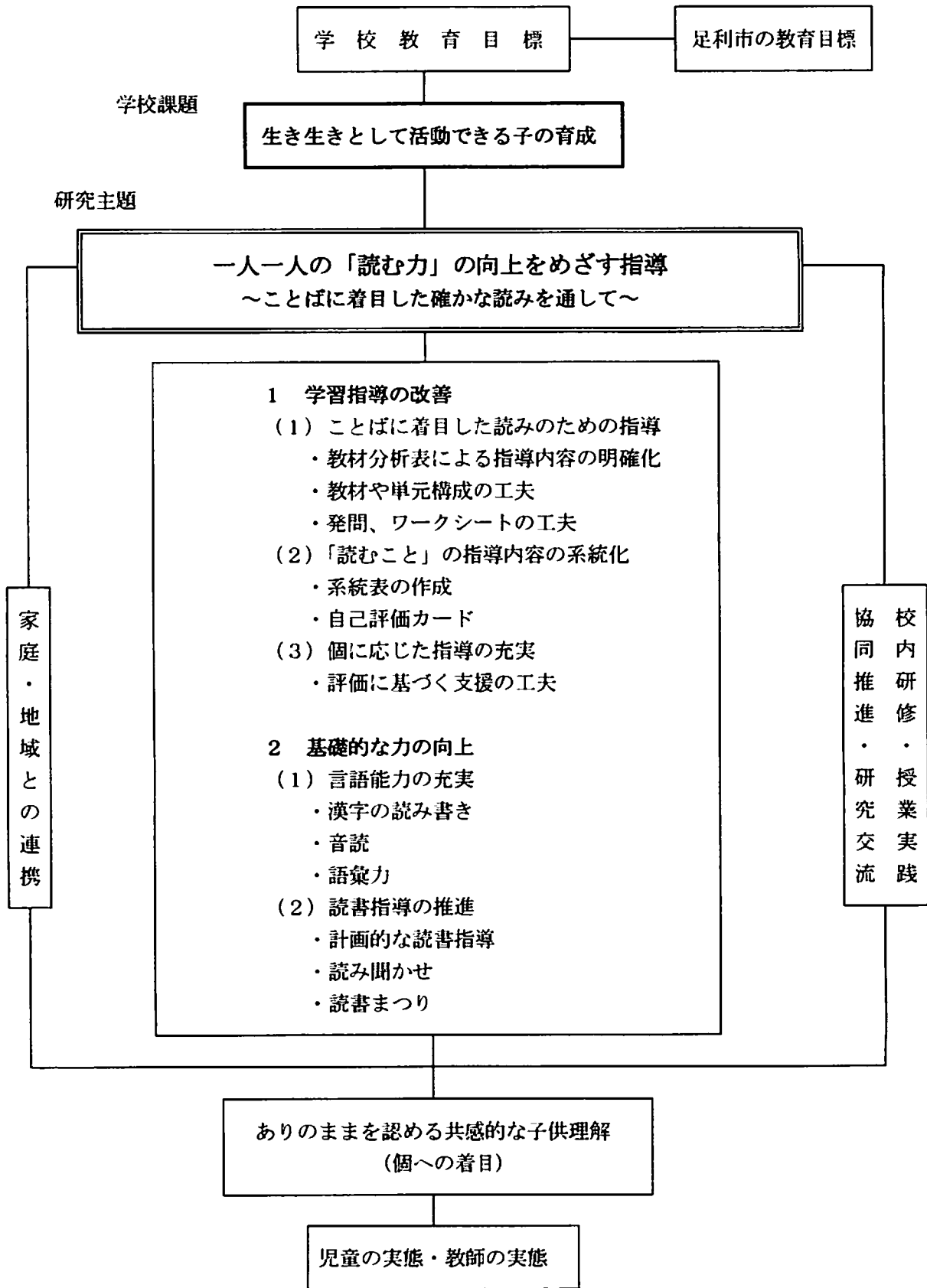
3 基本的な考え方

- 国語力を高めるためにまずは、「読む力」を高めていくことが必要であるととらえ、「読むこと」の領域に限って研究を進める。

学習指導要領の中では、「読むこと」の内容には、読書的な読みや必要な情報を得るための読みなども含まれているが、今年度はまず、教材文を読んで、「子どもが一人できちんと読み取れること」「読んで楽しさが味わえること」を目指したいと考え、「イ 叙述内容に即した読むことに関する指導事項」「ウ 想像的な読むことに関する指導事項」「エ 事象と感想、意見にかかわる読むことに関する指導事項」を中心に実践を行う。

- 「読む力」は、ことばに着目することを意識化させる中で意図的に指導することで、読みの技能として身につくと仮定し、その根拠となる教材分析を十分に行う。また、教材文について、系統的に考えるため、教材文を「文学的文章」と「説明的文章」に分けて、分析や指導法の研究を行う。
- 国語の時間の指導法の工夫・改善を行っていくとともに、基礎的な力の向上を目指した日常的な指導・活動にも力を入れ、実践的な研究の積み重ねに努める。

4 研究の全体構想



5 研究の内容と実際

1 学習指導の改善

(1) ことばに着目した読みのための指導

「読む力」を高めるためには、ことばに着目することを意識させる中で、意図的に指導し、読みの技能を身につけさせていくことが大切だと考えた。そのために、教材分析表を作成し、教材分析することで、読みの手がかり、読みの技能、言語事項などをもとに指導内容を明確にしていった。そして、それら教材分析をもとに、教材や単元構成の工夫を行ったり、ワークシートや発問を工夫したりしながら、授業を展開した。

<実践事例 1年 単元名 こえにだしてよもう 「くじらぐも」>

①教材分析表による教材研究

<教材分析表>

単元の目標	読みの手がかり		
○物語に興味を持ち、音読や動作化などを工夫して、楽しんで読もうとする。 ○登場人物の様子などを想像しながら、声に出して読むことができる。 ○はっきりした発音で音読することができる。	読みの手がかり	読みの技能	言語事項
全文	<ul style="list-style-type: none"> くじらぐも 四じかんめ 一ねん二くみの子どもたちがたいそうをしている。 	<ul style="list-style-type: none"> ○語名や挿絵を手がかりにして大体の内容をつかむ。 ○「いつ、だれが、どうした」話か注意させ、登場人物、時、場の設定を知る。 	(新出漢字) <ul style="list-style-type: none"> 子ども・空 右・男の子 女の子・手 天・見る (「」の意味) (語名、作者)
1の場面 P 4～ P 6 L 6	<ul style="list-style-type: none"> 大きな、まっしろい 四じかんめ 一ねん二くみの子どもたちがたいそうをしている 「一、二、三、四」 くじらも、 のびたりちんだりしんこきゅう みんなが～まわると、くじらも～まわりました とまれのあいずをすると、くじらも～ 「まわれ、右。」せんせい が～くじらも～ 	<ul style="list-style-type: none"> ○体操する子どもたちのまねをするくじらぐもの様子を動作化し、楽しみながら音読する。 	(「…も」の使い方)
2の場面 P 6～ P 7 L 7	<ul style="list-style-type: none"> 「おうい。」～くじらもこたえました 「ここへおいでよう。」～くじらもさそいました はりきりました 	<ul style="list-style-type: none"> ○子どもたちの音読見つけ、話す様子を動作化し 	
3の場面 P 8～P 9	<ul style="list-style-type: none"> 「天まで、とどけ、一、二、三。」 三十センチ 「もっと たかく。もっと たかく。」 五十センチ いきなり 空へ ふきとばしました。 あつと いう まに くものくじらに のって いました。 	<ul style="list-style-type: none"> ○くじらぐもに飛び乗ろうとする子どもたちの音読や様子を表す音読を見つめ、動作化しながら読む。 ○会話文の繰り返しによる、子どもたちとくじらぐもの気持ちの高まりを想像しながら読む。 	<ul style="list-style-type: none"> ジャンプ センチ いきなり ふきとばす あつというま
4の場面 P 10～ P 11	<ul style="list-style-type: none"> 「さあ、およくぞ。」 あおい あおい 空の なかき うみの ほうへ、むらの ほうへ、まらの ほうへ。 うたを うたいました。 どこまでも どこまでも つづきます。 	<ul style="list-style-type: none"> ○くじらぐもに乗って空を飛ぶ子どもたちの気持ちを挿絵を手がかりにして想像しながら読む。 ○くじらぐもに乗ったつもりで会話を考えながら読む。 	<ul style="list-style-type: none"> くりかえし
5の場面 P 12～ P 13	<ul style="list-style-type: none"> 「おや、もう おひるだ。」 おどろくと、 しばらくいくと、 ジャングルジムのうえに、 四じかんめのおわりのチャイム 「さようなら。」 	<ul style="list-style-type: none"> ○挿絵を手がかりにして子どもたちの様子を想像する。 ○子どもたちになりきって、くじらぐもと別れる時の気持ちを考えながら読む。 	<ul style="list-style-type: none"> ジャングルジム チャイム

②指導案

1 単元名 こえにだしてよもう 「くじらぐも」

2 単元の目標

○物語に興味を持ち、音読や動作化などを工夫して、楽しんで読もうとする。

(関心・意態・態度)

○登場人物の様子などを想像しながら、声に出して読むことができる。

(読むこと)

○はっきりした発音で音読することができる。

(言語事項)

3 単元について

(1) 教材について 一略一

(2) 児童の実態 一略一

(3) 研究主題との関連

本校では、国語の言語活動の根幹を読む力であるととらえ、読む力を向上させることが他の言語活動をも充実させるものと考えた。そこで、漠然とした読みではなく、ことばに着目させるために、本単元では、以下のような手だてをもって指導を進めていくことにした。

○題名や挿絵を手がかりにして読む。

・「くじらぐも」という題名からイメージを想像させたり、挿絵を見ていくことで登場人物やあらすじをつかませたりする。

○まとめたりや語や文として読む。

・新出漢字や児童にとって難しい言葉を丁寧に扱い、読めるようにするとともに、繰り返し音読できるように、授業中での音読の仕方を工夫する。

○人物に同化して読む。(本時)

・子どもたちとくじらぐものしたことや言ったことを表す言葉をつかませ、子どもやくじらぐもになりきって動作化したり、音読を工夫したりすることによって、興味・関心を持続させ、内容を理解させる。

・子どもたちになりきって、会話や気持ちなどを想像を膨らませて楽しく読ませる。

4 指導計画 (総時数10時間) 一略一

5 本時の指導

(1) 題目 3のぼめんの子どもたちとくじらぐもの様子をくわしくよもう。

(2) 目標 くじらぐもに飛び乗ろうとする子どもたちと、応援するくじらの様子を読み取ることができる。

(3) 展開 (別紙)

(4) 評価 くじらぐもに飛び乗ろうとはりきる子どもたちと、応援するくじらぐもの様子がわかり、楽しく音読することができたか。

(読むこと) <発表・観察>

別紙
(3) 展開

☆研究主題との関連

児童の活動	時間	学習活動への支援	読みの手がかり	主な評価基準 (は十分満足の様相)
1 本時の学習課題をつかむ。 3のぼめんの子どもたちとくじらぐものようすをくわしくよう。	5	・前時までの学習範囲(1・2の場面)を音読し、これまでの学習内容を想起させる。 ・3の場面の輪読を提示し、本時は、3の場面を学習することを伝える。		
2 3の場面(P8~9)を音読する。	5	・読みの後について3の場面を音読させて、その後で、読印と一緒に音読させる。	・手をつないで、まるいわになると ・ジャンプしました ・「天まで、とどけ、一、二、三」 ・やっとなんセンチ ・「もっと たかく。もっと たかく」 ・おうえん ・五十センチ ・いきなり ・空へ ふきとばしました。	・くじらぐもに飛び乗ろうとする子どもたちや応援するくじらの様子を考えながら、 <u>気持ちの高まりが分かるように音読することができる。</u> (読むこと) <発表・観察>
3 子どもたちとくじらぐもがしたこと、言ったことを読み取り、発表する。 ・手をつないで、まるいわになった ・ジャンプした ・くじらがおうえんした ・くものくじらにのった ・くじらはおうえんした	10	・子どもたちとくじらぐもがしたこと、言ったことを考え、発表させ、わかりやすく練習する。 ・子どもたちやくじらぐもの様子がかめぬ場合は、文章に戻って考えさせる。	・あつと いう まに ・くものくじらにのっていました。	
4 子どもたちになりきって動作化する。 ・だんだんと大きな声で読もう。 ・もっと高くとぼう。 ・だんだん高くとぼう。 ・最後は心をこめて大声で読もう。 ・大きい声で読んで。	10	・子どもたちになりきって動作化することにより、その時の気持ちを想像させる。 ☆子どもたちになりきって動作化させる ☆3 回出てくる「天までとどけ一、二、三」の繰り返しでの子どもたちの気持ちの高まりを想像し、声の大きさを変えるなど、工夫して読ませる。 ☆子どもたちを応援するくじらぐもの様子を想像し、読み方を工夫させる。		
5 学習したことを生かして音読する。	10	・グループで、子どもたちとくじらぐもになりきって音読させ、交代しながら練習させる。 ・工夫した音読を発表させる。		
6 本時の学習内容を振り返り、次時の学習内容を知る。	5	・次時は4の場面を学習することを伝える。		

「子どもたち」になりきって動作化する。



学習したことを生かしてグループで音読する。



本時で使用したワークシート

4	3	2	1
	きもちをこめてよむ。	すらすらよむ。	はっきりよむ。

☆おんどくのめあて

3のぼめんの子どもたちとくじらぐものようすをくわしくよう。

くじらぐも

)

(2) 「読むこと」の指導内容の系統化

① 「読むことの系統表」の作成

読み取るための技能を意識的に指導していくことで、児童が他の作品を読んだときにも読み取るためのポイントがわかり、自力で読み取っていくことができるようにしていきたいと考え、学年の発達段階に応じた「読むことの系統表」を作成し、指導内容を明確にした。

読むことの系統表

読み取るための技能		1. 2年	3. 4年	5. 6年
文学的文章	まとまりや語や文として読む			
	題名や挿絵を手がかりにして読む			
	だいたいの粗筋をとらえる			
	おもしろいと思う表現を指摘する			
	設定を知る(登場人物、中心人物、時、場)			
	場面を知る(時間の順序、場面の移り変わり)			
	人物に同化して読む(動作化、みきだし)			
	表現を味わう(繰り返し、比喩など)			
	中心人物の変容に気付く			
	クライマックス(山場)をとらえる			
	全体構成(初め、中、終わり)に気付く			
	情景を想像しながら読む			
	人物の言動を検討しながら読む			
	表現を味わう(語り口、感覚表現など)			
	登場人物の心情を読む(心情、性格、考え)			
	象徴(大切なもの)を考える			
	情景の効果を感じながら読む			
	全体構成(起承転結)をとらえる			
人物の変容と関連づけて自分なりの感想を持つ				
表現を味わう(色彩語、指環、象徴)				
説明的文章	まとまりや語や文として読む			
	題名や挿絵を手がかりにして読む			
	大体の内容をとらえる			
	主語・述語を押さえて読む			
	事柄や時間の順序			
	問いかけの文、答えの文			
	中心語句(キーワード)をつかむ			
	段落、要点をとらえる			
	小見出しをつける			
	まとめの段落を指摘する			
	文章構成(問いと答え、初め、中、終わり)			
	接続語、文末表現の違いに気をつけて読む			
	辞章の利用			
	各段落の役割をつかむ			
	文章構成(序論、本論、結論)をつかむ			
	事実と筆者の考えを読み分ける			
	要約したり、要旨をまとめたりする			
	筆者の意見に対する自分の考えを持つ			
必要な部分を選んで読む				
多様な辞書、事典の活用				

(参考：白河第二小学校)

ア 系統表をもとにした指導実践例

<文学的文章>

1年「おむすびころりん」

○おじいさんのしたことを表すことばをとらえさせ、おじいさんになりきって動作化したり音読の工夫をすることによって、興味関心を持続させ、内容を理解させた。

4年「白いぼうし」

○色彩表現や季節を表す言葉、比喩表現などに着目し絵で表すことによってイメージをふくらませ、表現を味わわせた。

6年「やまなし」

○場面を観点ごとに整理しながら対比させたり、関係する言葉に着目してイメージ広げたりすることによって、登場するものが象徴していることを考えさせた。

<説明的文章>

2年「たんぼぼのちえ」

○ことばを囲んだり、一つ一つのことばを取り上げて、ていねいに指導をすることで、時間の順序を表すことばを意識させた。

3年「ありの行列」

○接続語や繰り返しなどに着目して中心語句（キーワード）を見つけさせ、段落の要点をとらえさせた。

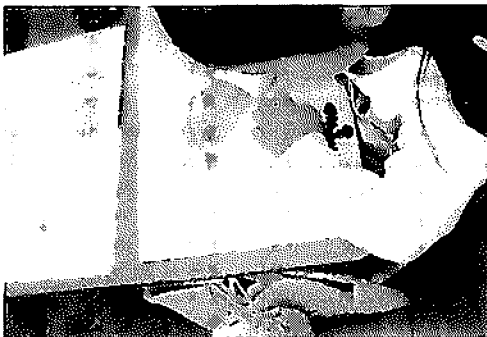
6年「生き物はつながりの中に」

○筆者の意図やキーワードとなる言葉に着目し読み取ってきたことについて、自分で感じたことや考えたことを、毎時間書かせておくことで、自分の考えを持たせやすいようにした。

②自己評価カードの作成

この単元を読むにあたって身につけさせたい読みの技能について、一人一人に意識させるために、自己評価の観点として活用した。常に読みの技能を意識させることによって、学習がより主体的になると考えた。

ア 2年「たんぼぼのちえ」の例



たんぼぼのちえ ()

(学しゅうのめあて)

じゅんじゆんに気をつけて
たんぼぼのちえをよみとろう。

(よみのわざチェック) よくできた◎ すこしできた○

	5/23	5/29	5/30	6/2		
ことばのまとまりごとにすらすらよむ。	○	○	○	○		
じかんをあらわすことばを見つけてよむ。	○	○	◎	○		
文のおわりに気をつけてよむ。～ます、～のです、～からです。		◎	◎	◎		
(きょうのべんきょうで) たんぼぼのようすや、そのわけがわかった。	○	○	◎	◎		

イ 6年「生き物はつながりの中に」の例

☆単元の展開やねらいが分かり、自分のめあてを立てることができたか。

縦線が引かれた空白の欄

縦線が引かれた空白の欄

○筆者が考えてもらいたいことを読み取り、進んで自分の考えをもった
りまとめたりして、他の人に伝える力
○教科書に書かれている内容をしっかりと理解して、筆者が伝えたいこと
を移とさずにとらえてまとめることができるか。

6 ○筆者の考えに対する自分の考えをまとめ、友達と伝え合う。
5 ○文章の要旨をまとめる。
4 ○生き物の特徴と () をワークシートにまとめる。
3 ○ (1) () を読み取り、ワークシートにまとめる。
2 ○ (2) () を読み取り、ワークシートにまとめる。
1 ○ (3) () を読み取り、ワークシートにまとめる。

「生き物はつながりの中に」学習計画
六年 組 番 ()



(3) 個に応じた指導の工夫

○評価に基づく支援の工夫

ワークシートやノートにより、一人一人の学習の見取りを確実にを行うことで、その時間における支援に役立てるだけでなく、次時の活動に必要なヒントカードを用意した。また、コメントによる励ましを行ったり、次時における指名や机間指導にも活用したりして、支援を行うようにした。

2 基礎的な力の向上

「読むこと」をねらいとした教材単元に限らず、様々な国語の授業の中で、あるいは学校生活のいろいろな機会を通して、言語能力を充実させる活動や読書をすすめる活動を行うことが、「読む力」の基礎となると考え、以下のような実践を行ってきた。

(1) 言語能力の充実

①漢字の読み書き

- ・発達段階に応じ、定期的な漢字のテストを設定することで、自主的な練習を促し、漢字の読み書きの力の定着を図る。

②音読

- ・音読カードを工夫することにより、家庭との連携も図りながら、音読の練習に自主的に取り組めるようにする。
- ・授業の中でも、微音読、一斉読み、点丸読み、隣同士での読み合い、グループで等様々な形での音読を取り入れることで、音読の楽しさを味わわせ、音読への意欲を高め、反復練習に取り組ませる。

③語彙力

- ・難語句を調べてノートやワークシートにまとめることを継続して行ったり、使わせていきたいことばを取り上げて指導していく。

(2) 読書指導の推進

①計画的な読書指導

- ・1週間に4回の朝学習の時間を全部、読書の時間とした。
- ・各学年で年間読書活動指導計画を立て、それに沿って読書指導を行った。

読書活動年間計画

[低学年]

1年生		2年生	
	指導内容		指導内容
4月	学級文庫の使い方を知ろう	4月	本の扱い方を知ろう
5月	本の読み聞かせを聞こう	5月	おすすめの本を見つけよう
6月	絵本を読もう	6月	読書まつり
7月	図書室の本を借りよう	7月	レオ・レオニの本を読もう
8, 9月	好きな本を読もう	8, 9月	好きな本を読もう
10月	読書まつり	10月	読書まつり
11月	本と友達になろう	11月	生き物についての本を読もう
12月	どうぶつが出てくる本を読もう	12月	アーノルド・ローベルの本を読もう
1月	詩を読もう	1月	詩を読もう
2月	お話を読もう	2月	物語を読もう
3月	読書活動のまとめをしよう	3月	読書活動のまとめをしよう

[中学年]

[高学年]

—略—

②読み聞かせ 読書まつり

- ・保護者や地域のボランティアの方により、低学年は毎週月曜日、中高学年は月2回、朝の読書の時間に読み聞かせが行われている。
- ・6月と10月には、「読書まつり」として、児童会の図書委員も企画に参加し、「こんな本読んだよコンテスト」や読書クイズ、昼休みの読み聞かせなどの活動を行っている。
- ・読書を奨励する意味で、図書の貸し出しカードが1枚終わった児童には、読書賞が与えられる。



ボランティア「よみきかせ隊」による
読み聞かせ

6 研究の成果と課題

I 研究の成果

- (1) 基礎・基本としての「読むこと」を取り上げたことにより、教師自身の国語の基礎・基本を身につけさせる日常的な取り組みへの意識が高まり、教師一人一人が1時間1時間の授業をこれまで以上に大切にできるようになった。
- (2) 「読むことの系統表」により、1年から6年までを見通し、今この学年で、この単元で、身につけさせたい力を意識して指導にあたることができた。
- (3) 教材分析を行ったことで、指導内容が明確になり、一つ一つのことばに着目させ、より意図的に読ませたり、読むための技能を身につけさせたりする指導が確実に行えた。
- (4) 全校として読書指導に取り組んだ結果、読書量が増え、「毎日の読書」が子どもたちの習慣として定着してきている。そして、自分から意欲的に読む活動に取り組める子どもたちが増えてきた。
- (5) 「読むこと」に絞って指導・研究を進めてきたが、正しく読むことを通して、自分が読み取ったことに自信を持てるようになり、積極的に発表する姿も見られるようになりつつある。

2 課題

- (1) 教材分析した結果をさらに授業に生かしていく方法や、一人一人の子どもの実態を確実にとらえて、さらにきめ細かな指導を行うこと等について、まだ不十分であると感じている。今後も、さらに研究を継続していきたい。
- (2) 単元の目標を達成するための指導計画やその評価のあり方についても、これまでの成果を踏まえて検討していきたい。
- (3) すべての学習の基本として、「読むこと」を重点とした指導に努めてきたが、本校の子どもの実態から、さらに読んだことをどう「伝え合う」という観点から、指導の充実を図ることも必要である。

言平

国語科では、国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力及び言語感覚を養い、国語に対する関心を深め国語を尊重する態度を育てることを目標としています。

矢場川小学校では、小教研国語科指導法研究会の会場校として、「一人一人の『読む力』の向上をめざす指導～ことばに着目した確かな読みを通して～」を研究テーマに掲げ、研究に取り組みました。

研究の実際には、子供に言葉に着目することを意識化させる中で意図的に指導することによって「読む力」を高めていくために、学年の発達段階に応じた「読むことの系統表」を作成するとともに、「読みの手がかり」となる言葉や表現、指導したい言語事項について教材分析表を作成する中で明確にすることによって、指導内容を明確にし教材分析を深められています。この教材分析を基に、発問の工夫やワークシート、自己評価カードの活用などをおして、子供一人一人の学習状況を把握し、個に応じた指導や支援に努められています。

また、定期的な漢字テストの実施、音読指導の工夫などによる言語能力の充実、読書活動年間計画の作成や読み聞かせ、読書まつりの実施による読書活動の推進など、国語の授業の時間だけでなく、日常的な指導や活動の中で子供の「読む力」を向上させる取り組みを行うなど、多くの示唆を与える貴重な実践であります。

今後においても、子供の国語力を高め、意欲的に学ぶ力を育成するために、国語科教育の指導の更なる充実が図られることを期待いたします。